

盛岡城・小・嘯

第20話

#盛岡城事件簿

今回は、取組を進める中で目にする数多の文献の中から、瓦版にも載りそうな気になる出来事を、いくつかピックアップしてご紹介していきます！

① 三階櫓(天守)への侵入者

寛保3(1743)年のある日の朝、修復工事中の三階櫓の屋根に上る見覚えのない長髪の侵入者が発見されました。その者は宮古の鼠入村(現在の岩泉町付近)の亀と名乗りましたが、話が覚束なく、詮議が終わるまで牢に入れられることとなります。そして、人の出入りが多い中とはいえ、不審者を本丸奥にある三階櫓まで通してしまった門番たちやその責任者には、追放等の処分が下されました。

② 江戸の大火で藩主活躍！

享保3(1718)年、上野・浅草付近では、度々火事の発生がありました。その出火の折、参勤交代で江戸にいた藩主は自ら現場に駆けつけ消火に奔走し、その活躍は幕府からの称賛を受けました。

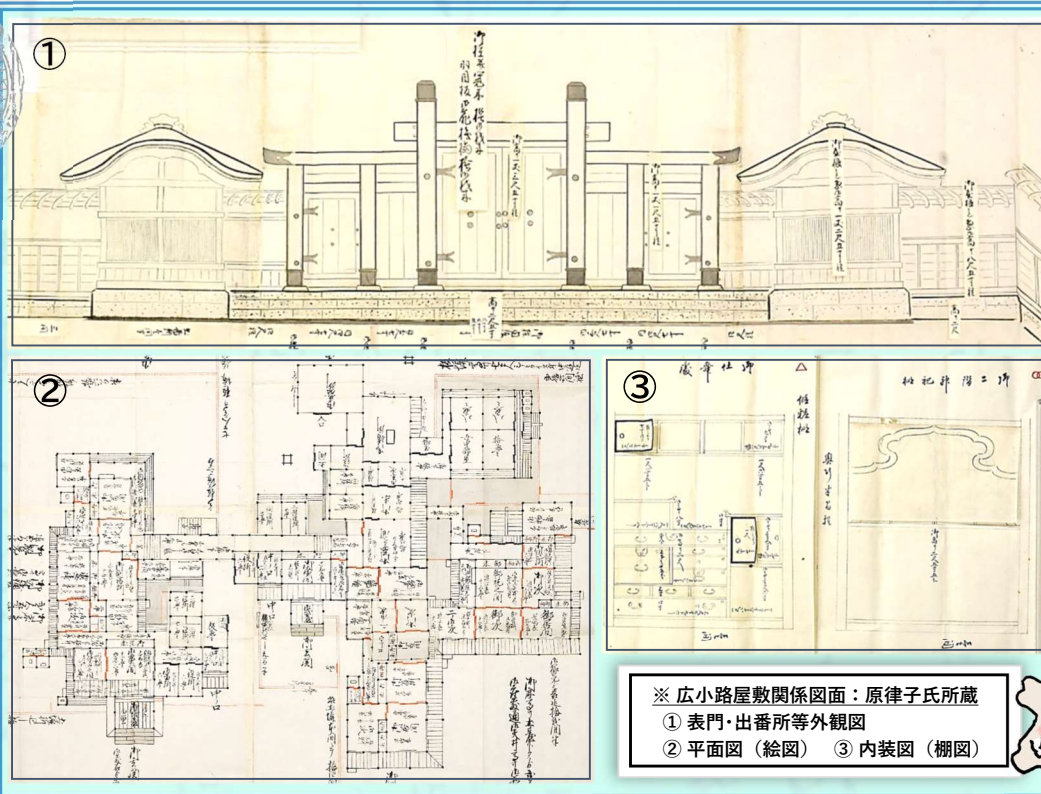
③ 白髭水之事

享保9(1724)年に盛岡城下で起きた大洪水では、中津川の三橋(上ノ橋・中ノ橋・下ノ橋)が流出し、水没した川下の町は水深1.5mほどに達したといえます。この時、溢れ出る水の上に立つ白髭の老人が目撃された話から、この洪水は、寛文10(1670)年の洪水とともに「白髭水」と呼ばれたそうです。

ほかにも、城下で猪が捕獲された話や砂金入の鉢が出土した話、罪人を千人斬った藩士の話など、淡々と記された文書の中は、数々の物語で溢れています。このような実際の出来事から、盛岡城や往時の人々の暮らしを自由に思い描いてみるのも、歴史の楽しみ方の一つかもしれません。

盛岡城復元調査推進室の取組の詳細は、市ホームページに掲載しています。

盛岡城に由来があると伝わる資料や建物等に関する情報などありましたら、盛岡城復元調査推進室(019-613-7956)まで、情報提供をお願いします。



※ 広小路屋敷関係図面：原律子氏所蔵

① 表門・出番所等外觀図

② 平面図(絵図) ③ 内装図(欄図)



盛岡城日記

雑書

Vol.22 2025年3月

かつて、藩内に数多く存在していた盛岡藩の建築物に関する情報は、在りし日の盛岡城の姿に迫る、重要な手がかりになります。今回は、平民宰相としても名高い原敬の一族で守られてきた古文書群の調査から発見された、盛岡藩の建物に関連する史料の一部について報告します。

第十九代内閣総理大臣である原敬の祖父、原直記芳隆(なおきよしたか)は、盛岡藩の有能な家老として、新田開発などの分野等で功績を残した人物で、書類の整理にも長けていたといわれます。第十三代藩主利濟(としただ)の時世、現在の岩手県庁・県議会議事堂の付近に藩主の世継ぎなどが住む御殿を造営する際、直記は普請の総責任者を務めており、今年度の原家の古文書群の調査で、その関連資料が発見されました。この建物は、文政十三年の完成当時「広小路御屋敷」と呼ばれ、後に第十五代藩主となる利剛(としひさ)などが居住しました。また明治維新後には、岩手県庁舎が完成するまでの約三〇年間、県庁機能を担う場所として、改変を重ねながら使用され続けました。上記図面のように、発見された史料には、寸法や各部屋の仕上げ、建具の種類のような詳細な情報が記されます。①の建築物については、平面図や古写真等も残ることから、各史料のさらなる検証により、その再現も期待できるものです。②の図面からは、塀の上に「忍び返し」が仕掛けられていたことや内装に赤壁が多用されていたことなどが読み取れます。さらに、仕入や支払に関する資料を検証したところ、この御殿の総工費は、約二十三億五千万円(一貫二十五万円で換算)であったと推定されました。今回調査した古文書群は、下図の高さ六〇cm程の文書箱一棹にすべて収納されますが、その総数は、少なくとも三百点以上に及ぶと考えられ、ほかにも盛岡城本丸大奥御殿に関する各種平面図や内装図など、多くの貴重な史料が確認されています。

このような調査や分析・検証による情報の積み重ねが、往時の盛岡城の姿を少しずつ紐解いていきます。史料である盛岡城跡は、すでに歴史的意義を有しているといえますが、その価値の捉え方は個人により異なり、時代により移りゆくものです。この盛岡城の姿を探る取組が、多くの新しい価値に結びつく機会となり、これからの盛岡城跡の道標の一つとなればと思います。

